

学位論文要旨

〈寛容〉という視座から構想する国語教育の研究

広島大学大学院教育学研究科

教育学習科学専攻 学習開発学分野

カリキュラム開発領域

学生番号 D182345 山田 深雪

I 研究の目的

この研究の背景には、(1)自分の考えを話すことへの不安、(2)教師と学習者の関係性に潜む不寛容、(3)寛容の実践の困難さという三つの大きな問題が潜んでいる。人々が排除や拒絶という明らかな不寛容や「人間が身を隠す仮面」(ボルノー, 1947: 79)としての沈黙に潜む不寛容、不寛容を隠蔽しつつ寛容を装う〈偽寛容〉を乗り越えるためには、困難や忍苦を要することは覚悟の上で、相違する意見をもつ者同士が粘り強くかかわり続けることが必要である。

本研究の目的は、自他のあいだに意見の相違があったとしてもかかわりを持続しようとする「〈寛容〉という視座」から、多様な考えや価値観との出会いを楽しむ国語教育を構想することである。

そこで、研究の目的を達成するために、以下①～⑤の内容を研究する。それぞれの研究内容に対応して、本論文では第1章から第8章を設けた。

- ① 寛容思想の変遷を概観し、寛容思想が抱える課題を明らかにする(第1・2・3章)。
- ② 思想としての寛容と国語教育の基盤となる〈寛容〉の結び目を明らかにし、〈寛容〉という視座を設定する(第4章)。
- ③ 〈寛容〉という視座から自己のこれまでの実践を見つめ直し、自己の国語教育観の変遷から国語教育の課題を明らかにする(第5・6章)。
- ④ 〈寛容〉という視座からつくる授業実践の提案と分析について記述する(第7章)。
- ⑤ 〈寛容〉という視座から構想する国語教育について提案する(第8章)。

II 研究の方法

第1章では、寛容思想の変遷を通時的に概観する。ここでは、大澤(2004)の「概念(言葉)の連続性のみを追うことは、思想のダイナミズムを見失うことになりかねない」(p. 87)という指摘に基づき、キリスト教発祥に関わる古代ローマ期、その思想をふまえ、宗教上における寛容が活発に議論された近世ヨーロッパ及びアメリカ開拓期までの寛容思想の変遷を通時的に概観することを通して、寛容思想が抱える課題を明らかにしていく。

第2章では、寛容思想が抱える課題である「寛容の実践に常に付き纏うジレンマの克服」について論じる。寛容論と宗教の共存について研究した大西(2009)は、「寛容に言及する場合、寛容が論じられる言説空間への着目が必要」(p. 41)と述べる。故にまず、現代社会において寛容が論じられる言説空間として、不寛容の歴史的事実である二度の世界大戦に着眼し、ラッセルと渡辺一夫の寛容思想の共通点を明らかにする。さらに、日常において最も不寛容を実感しやすい意見の相違と礼節の関係に着眼したベジャンの寛容論に依拠しながら、多様な価値観との共存が求められる現代社会における寛容の実践についての課題を明らかにしていく。

第3章では、続く第4章にて論じる「〈寛容〉という視座」の設定に向けた理論的基盤を構築するために、寛容の実践に常に付き纏うジレンマとその克服を論じた人物である渡辺

一夫と彼の寛容論に着眼する。まず、渡辺一夫寛容論を検討する意義をふまえ、渡辺の寛容論の土台となる「ユマニズム」の思想について彼の文献をもとに考察する。続いて渡辺自身の生き方、特に思想と生き方の連関について、大江健三郎による渡辺の人物評及び渡辺の死後に発見された日記をもとに論じる。さらに、相違の中でも各々の言葉を自由にするための要件について、戯文「砂丘での対話」(渡辺, 1942a) より示唆を得る。最後に、これまでの渡辺一夫寛容論の検討から、自分の言葉で他者と相違する事柄についてかかわり続けるために必要な態度について明らかにしていく。

第4章では、ここまで論じてきた寛容思想、渡辺一夫寛容論の検討をふまえ、国語教育の基盤となる「〈寛容〉という視座」を設定する。まず、中野重治と渡辺一夫の間でかわされた「往復書簡」(1949)の分析をもとに、コミュニケーションに纏わるペシミズムを乗り越えるための思想的基盤について検討する。その上で、これまでの議論で見えてきた思想としての寛容と国語教育の結び目を手がかりに、国語教育の基盤として位置づける〈寛容〉という視座を設定する。

第5章では、第4章で得た〈寛容〉という視座から見た自己の小学校教員時代の国語教育観の変遷を明らかにする。国語教育観の変遷を辿る部分においては、論者自身の体験、教育実践論文、学習指導案、授業記録等から学習者の様相及びその当時の論者自身の思いや考えをもとに、「个体史」(野地, 1956)的記述を試みる。その上で、学習者の様相及びその当時の論者自身の思いや考えが自己の(教師の)どのような国語教育観によって引き起こされたのかを〈寛容〉の四つの視座と関係づけながら明らかにしていく。

第6章では、第5章に引き続き、自己の大学教員着任以降の国語教育観の変遷を明らかにする。国語教育観の変遷を辿るために、大学での授業「名著講読」における対話実践、「ことばの市民塾」における対話体験、過去に行った「領域：言語文化」物語型CM制作実践について学習者たちとの対話を通して見えてきたことについて記述していく。第5章と同じく、学習者の様相及びその当時の論者自身の思いや考えが自己の(教師の)どのような国語教育観によって引き起こされたのかを〈寛容〉の四つの視座と関係づけながら明らかにしていくと共に、第5章・第6章を通じて見えてきた国語教育の課題について論じる。

第7章では、第5章・第6章を通じて見えてきた国語教育の課題を問い直すために行った授業実践について記述する。ここでは、「学習者自身の寛容」の問題に重心を置きつつ、授業実践の理論と方法、試行した授業実践における学習者の様相と考察、実践当事者である論者らによる授業実践の自己省察という三点を論じる。

第8章では、〈寛容〉の四つの視座、自己の国語教育観の変遷から見えてきた課題、そしてそれらに基づき行った授業実践の試行を総合し、〈寛容〉という視座から構想する国語教育の思想と授業理論、カリキュラムの展望について論じる。

III 本研究の成果

本研究の成果として(1)～(5)を挙げ、後に説明を簡潔に記す。

(1) 寛容思想が抱える課題

第1章・第2章と寛容思想の変遷を概観したことにより、寛容が、信教の自由や神のことばの解釈をはじめとする宗教上の問題から、多様性と意見の相違という「排除の打破」を問うものへと変容してきたことが明らかになった。それは、寛容がリアルな世界で、そして一人一人の人間の側で問われるようになったことを意味する。福島(2018)が遺した「寛容は、ある意味で、つねに不寛容を生み出しうるものであり、したがって、徹頭徹尾寛容であることは概念的にも実践的にも不可能」という結論は、寛容が決して美しい共生の原理ではないことを伝えている。寛容の実践に常に付き纏うジレンマを克服するためには、他者と相違する状況においても、寛容の実践に常に付き纏うジレンマを暗黙裏にせず言葉にして伝え合い、互いの意見について持続的に対話するという地道な正対が求められる。

第3章では、渡辺一夫の寛容論に着眼し、自分の言葉で他者と相違する事柄についてかわり続けるために必要な態度について考察した。その結果、相違の中でも各々の言葉を自由にするためには、各々の内面にある「暗い」「弱い」などのペシミスティックな感情が提出されたとしても、それを「話すことをやめる理由」にしないことであることが明らかになった。

(2) 〈寛容〉という視座の設定

第4章では、〈寛容〉という視座の設定に向けて、思想としての寛容と国語教育の結び目を探るべく、中野重治・渡辺一夫「往復書簡」(1949)に見られるコミュニケーションを分析した。その結果、思想としての寛容と国語教育の基盤となる〈寛容〉の結び目は、自身や相手によって語られにくい「本心」にコミュニケーションすることであった。このことから、人間の生と密接な関わりをもつ国語教育の基盤となる〈寛容〉とは、本心の中に渦巻いている「内言(思う・考える)」としてのことばの解放であると定義した。さらに、不寛容の温床となる〈偽寛容〉と「無寛容」を脱する方途についても考察した。

以上のことから、自他のあいだに意見の相違があっても対話を持続しようとする〈寛容〉という視座として、【①自らが多数派や英雄的存在への傾倒に陥っていないかを問うこと】、【②不寛容を見抜く、批判的・反省的思考を機能させること】、【③本心の中に渦巻いている「内言(思う・考える)」としてのことばが解放されていること】、【④意見の相違が生じて最後は自らの判断で検討を終えること】の四つの視座を設定した。

(3) 自己の国語教育観の変遷から見てきた国語教育の課題

第5章・第6章にて、〈寛容〉という視座から自身の国語教育観の変遷を見たことにより、国語教育の課題を発見した。それは、自分の考えを思考・判断・表現することばとそのことばを生み出す人間が抱える「複数の自己」に、教師、学習者自身、その周辺にいる他の学習者、時には実践者(教師)を見る者という国語教育実践の場に会するそれぞれの者たちがどのようなまなざしを向けるのかという課題である。

そこで、教室空間にいる学習者たちの抱え持つ無数の「複数の自己」へのまなざしを問い直す切り口として次の四つを設定した。一つは実践者（教師）と実践を見る者（評価者や教師の指導者的存在）との関係性、二つは、学習者自身が抱え持つ「複数の自己」へのまなざし、三つは他の学習者の「複数の自己」へのまなざし、四つは教師から複数の学習者たちの「複数の自己」へのまなざしである。

(4) 〈寛容〉という視座からつくる授業実践の試行

第7章では、〈寛容〉という視座からつくる授業実践を構想し、「複数の自己」への〈寛容〉を目指す文学の授業実践を戯文という方法論を採用して行った。

その結果、「複数の自己」への〈寛容〉が発揮されるように、戯文の創作と対話をセットにしたことで、「複数の自己」それぞれへの価値・意味の気づきをもたらされた。この状況を支えたものが、〈寛容〉の二つ目の視座【不寛容を見抜く、批判的・反省的思考】の健全性であった。また、戯文は「複数の自己」への〈寛容〉の態度（閉鎖的か開放的か）を映し出す方法論であることが確認された。他者との対話では、〈寛容〉の三つ目の視座【本心の中に渦巻いている「内言（思う・考える）」としてのことばの解放】が鍵となる。一方で、戯文を書く必然性を学習者に持たせることが課題であることが明らかになった。さらに、「複数の自己」に対する論者（教師）の内面では、「教師がねらう読みのレベルまで導かねばならない」という思想と『「複数の自己」に〈寛容〉でありたい』という思想が激しく対立し、教師の文学の授業観の問い直しが起こった。学習者の目標とともに、学習者にまなざしを向ける教師のスタンス（目標）も検討する必要があることが明らかになった。

(5) 〈寛容〉という視座から構想する国語教育についての提案

第8章では、〈寛容〉という視座から構想する国語教育の思想と授業理論、カリキュラムの展望について提案した。

〈寛容〉の四つの視座は、授業空間（＝対話）という^{なま}生の体験を通して自然と湧き出てくる自発的な問いであり、気づきであるという立場から、その思想を「六つの階層」を設定して示した。六つの階層は〈寛容〉へのプロセスでもある。

授業理論については、目標・内容・教材・方法・評価の五つについて述べた。

まず、目標は、六つの階層と〈寛容〉の四つの視座をもとに、19ブロックにわたり措定した。学習者の目標は表1、教師の目標を表2に示し、学習者の目標の照準は、義務教育修了段階に当てた。

次に、〈寛容〉という視座から構想する国語教育を、新たに「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」という言語の活動の基盤に据えることとし、(A)言葉の意味、(B)人間の生き方、(C)多様な情報、(D)筆者や話し手の意見（主張）、(E)過去の出来事の五つの教育内容を表3に示した。

続いて、六つの階層の〔第1層：「複数の自己」を呼び出す課題の設定〕で用いる教材に

ついて、先述の(A)～(E)の内容ごとに検討し、教材例を表4に示した。

さらに、方法については、学習者が教材と出会い「複数の自己」（「一個の人間の中に在る『複数の』考えを生み出す自己の総体」）を表出する方法として、戯文の他に三つのアイデアを示した。方法については実践を積み重ねて検証していく必要があるが、出てきた考え（「複数の自己」）を淘汰し、みんなの前でよりよい考えを披露するためや複数の考えをまとめるための方法とならないように留意する必要がある。

最後に、試行した授業実践（第7章）を踏まえ、評価のポイントを三点挙げた。一つは、授業中、教師は一人の人間として学習者のことばに耳を傾け、学習者を評価しようとするよりも自分自身を省みること強くすることである。二つは、1実践で学習者が変化することを期待せず、大きなスパンで学習者を評価することである。そのために、授業の記録を残し、それを学習者も教師も経時的に振り返ることができるようにする。三つは、個人内評価を基本とし、教師は学習者の〈寛容〉への気づきを見取ることである。

本研究におけるカリキュラムは、水本（2017）の唱える学習者の「当事者性」を重視することとした。それは、教師と学習者の相互行為によって、学習過程で知識だけでなく、目標も創発・構築されるという考え方である（同：2）。

IV 本研究の課題と今後の展望

本研究から導かれた新たな課題として四点を述べつつ、今後の研究についての展望を述べる。課題の一点目、二点目、三点目は互いに重なり合う部分をもつ課題であり、各課題を明らかにすることで他方の有り様が見えてくる関係であると見ている。

(1) 「最低限の礼節」の基準の検討

課題の一点目は、「最低限の礼節」の基準について、基準の必要性も含め基準の内容を検討することである。

ベジャン（2017）の「意見を異にすることを許す際に伴う避けられない軽蔑や不一致を寛容する」（p.164）という「最低限の礼節」の基準について、森本（2020）が「もう少し高く」（p.275）と提起したことは本論でも述べた通りである。

論者は国語教育における「最低限の礼節」の姿を見出すために、第7章で述べた文学の授業実践を河上（2022）と行い、ユウキの振り返りの記述から「意見を上書きされないこと」、ケイとミツルたちとの対話から「意見の対立から逃げないこと」や「はずかしさを口に出せること」など、「最低限の礼節」を「もう少し高く」した行為をいくつか見出してきた。だが、まだまだ「最低限」の基準は明確ではない。むしろ個々の人間によって基準は変化せざるを得ないため、基準を定めること自体に若干の躊躇があるのだが、仮に基準が高すぎる場合は「礼節の囲い」が堅牢になり、低すぎる場合は相手の存在を否定することにつながりかねない。故に、その基準を検討することは学習者の人権を守る上でも実践を構想する上でも重要であると考えられる。

(2) 国語教育の授業理論と〈寛容〉の関連性

課題の二点目は、国語教育の授業理論と〈寛容〉の関連性を探ることである。

第8章にて「〈寛容〉という視座から構想する国語教育の提案」を記述していく際、特に学習者の目標の〈寛容〉の二つ目の視座【不寛容を見抜く・批判的・反省的思考を機能させること】が、これまで培った読む能力や話す・聞く能力等に少なからず依拠すると考えた。そのため、本教育では、直接的に読む能力を育てることを目的としないのであるが、〈寛容〉という視座を働かせるためには、他の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の授業理論と〈寛容〉との関係性を研究することが必要となる。例えば、石山脩平の解釈学的立場の指導段階から成る三読法（三層法）とその批判として提唱された児童言語研究会による一読総合法を〈寛容〉の視点から捉え直したり、倉澤栄吉の「読解指導」や大村はまの「単元学習」等に照らして、〈寛容〉の授業理論を見直したりすることなどである。このような研究を通して、国語教育研究史において〈寛容〉の研究はどのような意味をもつのかを問い直しながら、授業案とカリキュラムの開発に取り組む。

(3) 国語教育実践の場のまなざし（視線）の問題

課題の三点目は、国語教育実践の場に会する者のまなざしの中にある「視線」の内実を検討することである。

論者は、第6章第4節にて、自分の考えを思考・判断・表現することとそのことばを生み出す人間が抱える「複数の自己」に、教師、学習者自身、その周辺にいる他の学習者、時には実践者（教師）を見る者という国語教育実践の場に会するそれぞれの者たちがどのようなまなざしを向けるのかという課題を提起した。本論では、「ここでの「まなざし」とは、視線や態度、ものの見方である。」と定義づけたが、「視線」の問題について研究を深めたい。視線の内実を明らかにすることで、「複数の自己」に向けるまなざしと〈寛容〉の四つの視座の関係性をより明確に説明できると考える。視線の内実を検討する際には、ラブレール『ガルガンチュア物語』に登場する「テレームの僧院」とその対極の性質をもつフーコーの「パノプティコン（監獄）」に着目したいと考えている。視線の作用によって〈寛容〉が教室内の規律となることを防ぐためにも、視線の内実と視線が「見られる」者の意思や主体性に及ぼす影響について明らかにしていく。

(4) 「个体史」的記述の継続

最後の課題は、論者自身の「个体史」（野地，1956）的記述の継続である。

自分自身について「个体史」的記述をするということは、自らの信念が一体何から生まれているのかを見定めることであるが、本論でも述べたとおり非常に「しんどい」作業を伴う。だが、自らの信念の母体を「个体史」的記述を通して俯瞰的に見ることができれば、意識的・無意識的にこだわっている信念を「これは本当に教育と関係あるのか？」と問い直すことができる。その問い直しは、「あやまっている国語教育事実観」（p. 24）や

「国語教育実践営為の惰性化と過労性」(同)を防ぐことにもなる。

主要引用参考文献

Teresa M. Bejan (2017). *Mere Civility: Disagreement and the Limits of Toleration*. Harvard University Press.

大澤麦 (2004) 「寛容」古賀敬太編著『政治概念の歴史的展開 第1巻』晃洋書房, 85-103.

大西克明 (2009) 「寛容論と宗教の共存：共存の形式に関する考察」『東洋哲学研究所紀要』 25, 41-55.

中野重治・渡辺一夫 (1949) 「往復書簡」『展望』3月号, 筑摩書房, 31-41.

難波博孝 (2008) 『母語教育という思想—国語科解体／再構築に向けて—』世界思想社

野地潤家 (1956) 『国語教育』光風出版

福島清紀 (2018) 「思想史的考察 寛容とは何か」工作舎

ボルノー (1947) 岡本英明訳 (2011) 『畏敬』玉川大学出版部

水本徳明 (2017) 「学習観の転換と経営管理主義の行方：公教育経営における権力様式に関する言語行為論的検討」『教育学研究』84 (4), 398-409.

森本あんり (2020) 『不寛容論：アメリカが生んだ「共存」の哲学』新潮社

山田深雪・河上裕太 (2022) 「「複数の自己」への寛容を目指す文学の授業実践：戯文という方法論を用いて」『国語科教育』91, 36-44.

渡辺一夫 (1942a) 「砂丘での対話」『渡辺一夫著作集 10 偶感集上巻』(1970a) 筑摩書房, 106-113.

渡辺一夫 (1951a) 「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか」『渡辺一夫著作集 11 偶感集中巻』(1970b) 筑摩書房, 162-174.